

サービスハウス通信

行事写真



8月19日、笠岡にひまわりを見に行きましたが、残念ながら花は終わりキバナコスモスが咲いていました。



アネックス屋上で収穫したかぼちゃ



8月22日 いけの飯店で食事会



牛乳パックを再生して、かわいい籠が出来ました。



私のいちばん!



ルウリウ

第10号

H23年9月8日

発行

社会福祉法人東光会
サービスハウス 事務室

TEL084-941-5255



むかし、昔...

中島 栄

今回は中島 栄さん作のお話です。

むかし むかし
そのむかしおとぎの
国という国がありました。

気な足取りで歩いていきます。
そのうち秋の頃となり、ある夜の
こと、大きな嵐となり、一夜のう
ちにモダンなお家も、あの美しく
やさしいおんな主も、広い庭の
花々も跡形もなく、唯、ヒューと
風が吹き、美しい花の庭も雑草の
広場に変わっていました。



街の人々は、只々、驚きとあの
老女のことを偲びそれぞれ涙して
いました。

人々は花の種を持ち、水をあた
え、広い野原と化した地をふたた
び花でよみがえらせ、明るい幸せ
な街の人々に変わっていました。

おとぎの国のあの美しい女ある
じは、庭に咲いていた花の精だっ
たのです。

さみしい街を
よみがえらせ、
人々をはつらつと
生き返らせた花の
精のお話でした。



この国の小さな町に古びたお屋敷
があり、古びてはいてもモダンで、
トンガリ屋根の先には、金を取り付
けてあり、赤いお屋根は太陽に輝い
ていましたが、悲しいことに壁は所
どころ崩れ、古さを物語るかのよう
でした。

このお屋敷の主は、美しい老女で
した。ロングドレスにながーい髪の毛
をリボンで結んで気品に溢れた老
女でした。

広いお庭には、色とりどりの草花
が咲き、蝶が舞って夢のような風景
でした。

おんな主は、毎朝花を摘み、花か
ごいっぱいになると街に出て行き交
う人々に、「花をどうぞ」とひとり
ひとりに花を手渡して、「幸せにな
りましょうね」の言葉をかけ、美し
い笑顔で目もといつもやさしさに
溢れていました。

人々は、花を受け取ると明るく元

◆台風12号がゆっくりと通り過ぎ、涼
しい秋風を運んで来てくれました。幸
い当地は被害がありませんでしたが、
紀伊半島は大変な被害が出ています。
今月、アネックスでは、消防非難訓
練を予定していますので、皆様ぜひご
参加下さいますようお願いいたしま
す。

シベリヤへ送られて II

郡 誠司



* ラーゲリ入所 *

部隊は、第三ラーゲリ(収容所)と称する所へ入ることになった。四方は高い板塀に囲まれ、四隅には望楼が建てられ、二十四時間ソ軍兵が監視に立っていた。それ程日本兵の事に限っては未知である。ラーゲリの外郭にはソ軍兵の兵舎があり、ラーゲリの所長はソ軍少佐ということであった。

塀の中央部には衛兵所が作られ、日本兵の出入りは厳重な扱いであった。部隊は、一から三迄の中隊の宿舎が割当てられ入居していった。到着した日は、入居後の休養を取るこ



シベリア回想 早田寛一 画伯の
シベリア抑留鎮魂歌より

とが出来た。

部隊が一か所に揃ったことにより、本部炊事班は給食を始めなければならぬ。ただ到着早々ではあるし厨房棟など有るわけがない。当然野外で手の込んだ食べ物など作れない。夕食に出たのは「すいとん」だった。それぞれの兵の飯盒がこれからの食器になる。兵は空腹に耐えていた。飯盒一杯の「すいとん」が、どれだけうまかったか。

兵は翌日から中隊単位で作業場に行く。一中隊は貯木場へと出向いた。衛兵所でソ軍兵の点呼を受ける。日本兵の通訳がついていて、各中隊の人員を数え、やっと門を出る。ソ軍兵の算数能力は低能だ。隊の前後左右にはソ軍兵がついている。これが毎日である。現地へ着くと、エニセー河から揚げられた乱雑の木材を、一本一本ロープで引っ張り出し整理して積み上げていった。

ラーゲリの背後を、シベリア鉄道が走っている。この鉄道を渡って貯木場へ通って四、五日してから製材工場に経験ある者が数名選ばれた。僕もその一人として参加した。工場へ行って規模の違うのには驚いた。製材機械の作業方法を詳しくは書かないが、末口一筋からの材木を一度に何枚にも切りだしてしまうのだから、さすがに大雑把な国としか言えなかった。この地へ到着するまで、将校は軍刀

を持っていたがラーゲリへ来てから取り上げられてしまった。また、日本兵たちの腕時計も預かるという形で取り上げられてしまい、もう、時間も何もかもわからなくなってしまった。ただ、起床の合図に吊り下げられた、レールをたたく音で目を覚ますのが通常になっていった。起床は六時、十月にもなると朝はうす暗い内から起きるし、夕方五時には暗くなってラーゲリへ帰って来るようになる。

貯木場、製材へ行っている中隊は引き上げて、次からは一中隊全員で機械工場の建設現場へ通っていた。

煉瓦を積み上げる作業は、現地の男女で、多人数で作業を進めていた。警戒兵は相も変わらずついていた。

日本兵の大半は大屋根の木部作業をしていたが、僕ら三名は煉瓦を積み上げるセメントを練っていた。セメント・砂・砂のかきあげなどすることは忙しい程何回も練っていた。老マダムが引く馬車が何度も往復していた。この現場のミキサースイッチ係として、マダム・ナターシャが付きっきりで、指示をしていた。

昭和二十年の年末頃までは、現地の人でさえ黒パンも買えず、昼は何も食べず体を休めている人たちが多かった。

この頃、我々でさえ朝は黒パンにスーぷだったが、スーぷのじゃが芋が凍ったのが入ってあって、ゴジゴジとし

て食べれるものではなかった。昼は携行用として、黒パンの小さな片を貰うのだが、これも朝食と一緒に腹に納め、昼が来ると現地人と同じように焚火にあたっていたものである。

次号につづく

六六年目の出会い(2011年)



いつもの通り、平成二十三年八月十三日、サンビレッジ一階ホールへ新聞を読みに行った。見出しを見てるうちに意外な記事が目にとまったその項を読んでみよう。

「シベリア抑留」についてであった。一九四五年八月、日ソ中立条約を破り満州国に侵略したソ連軍は、終戦後において日本兵を捕虜として、鉄道建設、森林伐採、開墾地建設など、シベリア各地の収容所(ラーゲリ)へ送り重労働に従事させたのです。その一人がサービスハウス通信「シベリヤに送られて」の一文を書いた筆者であります。

終戦が、一九四五年(昭和二十年)八月十五日、それから六十六年目にこの記事に出会ったのです。

筋道が少し前後しますが、この日ソ中立条約を破った「シベリア抑留」の記事については舞鶴港に上陸後、作者がやっと福山市民に入籍されたその後のことになる。我が家に落ち着きそれから二年も三年も経ってから世間の報道で知ることになった訳であり、この記事については六十六年目の出会いで終わっておきたいと思えます。